

令和6年度 第3回 静岡市多文化共生協議会 議事録

- 1 日時 令和6年12月12日（木）午後7時から8時30分まで
- 2 場所 静岡市役所 静岡庁舎新館3階  
コミュニティ&ダイニングスペース「茶木魚」
- 3 出席者 静岡市多文化共生協議会委員 13名  
赤田陽子、磐村文乃、エフィ グステイ ワフユニ、金笑杰、  
角替ひろき、てるやあんへら、なかむらなおやす、のたとしろう、はなざわうらいや、  
ひだすむ やましためりん、だ やまもと るしあ えみこ、よしいひろあき  
(欠席者：斉藤康博)  
望月哲也観光交流文化局長、岩田智穂観光交流文化局次長、事務局
- 4 傍聴者 なし
- 5 次第
  - (1) 開会
  - (2) 議事 報告書の作成に向けた内容の整理  
ア 「教育の機会や場づくりについて」  
イ 「留学生が住みやすいまちづくりについて」
  - (3) その他  
ア 第4回会議  
(ア) 日時 令和7年2月6日（木）19:00～20:30  
(イ) 場所 静岡市役所静岡庁舎新館3階 コミュニティ&ダイニングスペース  
「茶木魚」  
(ウ) 内容 報告書（案）の確認  
イ 審議結果報告 令和7年3月予定
  - (4) 閉会
- 6 議事録
  - (1) 委員紹介  
照屋委員：  
今年度初参加です。静岡市多文化共生総合相談センターの清水区役所窓口で毎週木曜日にスペイン語の相談員をしています。よろしく願いいたします。
  - (2) 議事  
野田会長：  
最初に、前回の吉井委員からのご発言について、少し補足の議論をしたいと思えます。静岡市外国人住民アンケートで、静岡市内で今就職を望んでいる留学生が

2013年度の12.6%から2020年度は36.2%に増えている点や、静岡県大学課の資料から、卒業生のうち78.3%が日本国内に留まっており、29.9%は県内に、33.8%は県外へ就職進学しているとの結果について、吉井委員から、「他の政令市などと比較して、静岡市がそれだけ定着しないというか、留学生在が静岡に住まないという問題が果たしてあるのかどうか確認がまだ取れていないので、それが政令市の中ではまずまずなので、もっとこれを伸ばしましょうというのか、同じような政令市の中ではかなり低くて、全然伸びがないというかどンドン外へ出てしまい困った問題ですという前提で話が進んでいます、本当にそうなのかということがわからないと、この議論が本当にすべき議論なのか、もっと伸ばすべき議論をすればいいのか、遅れている部分をキャッチアップするような議論がいいのかということが、わかりません。」というご意見をいただいています。留学生在が静岡に定着しないとか、就職先がないからだという問題があるとすると、それを何かしらのデータで示せるのかという、それが無いと議論が進まないのではないかとご意見がありました。また、「聞き取り内容に、外国人留学生在がああしてほしい、こうしてほしいという希望が出てきているんですが、なぜそれを希望しているのか、それをすることによって自分たちがどうなるのかがわからないと、単なる希望に聞こえてしまうので、講座をしてどうなるのかがわからないと、この人たちの希望を聞いてあげれば、打算的ですけど定住とか定着するようなものにつながるのかどうかかわからないので、ただここに出してきた希望をこういう形で考えましょう、こういう希望が出てきたんだったら、こういうふうに答えましょうというのは、果たしてそれがいいことなのかどうか。その人たちの希望がかなうという部分ではいいのかもしれないですが、今日のこの会議で話している内容の目的として、講座情報をきちんと伝えれば就職するんですか、定着するんですかということとは少しずれると思うので、私は希望を聞けばいいということではないような気がします。」との意見をいただきました。前回、市が関わるカルチャー講座などが色々あって、そういうものにも参加したいという流れがあったんですけども、それについてみんながその講座を望んでいるとか、講座を受講すれば定着に結びつくのかということも考えてみたいというご意見だと思います。この2点について、皆さんからもどのように感じるかというご意見をいただければと思います。例えば最初の部分ですと、静岡になかなか定着しないような気がするというか、感覚的に私も実はそういうものがありますが、留学生在が静岡に来たとしても、外のエリアに出てしまうようなところがあって、それが本当に客観的なデータに基づいているのかどうかといったところが、例えば私達も日本語学校を運営している身として、感覚的なものではあるんですけど、そのようなことを感じる機会が多く、そういうことを実感することはありますが、例えば皆さんの中にも静岡になかなか定住しづらいついていう何かしらがあるとすれば、それもご意見かなと思います

が、何か皆さんの方でそういったものを感じることはありますでしょうか。別に感じていることを言うてくださというわけではないんですけども、実際には静岡に残っている人も多いですよというようにことももちろんあってもいいと思います。いかがでしょうか。

ヤマモト委員：

留学生の在留資格の話だと思んですが、大学で4年間勉強する学生と、日本語学校で勉強している人たちとで課題は異なると思うところがあります。4年間かけて卒業した学生達は、おそらく就職はその先にあると思うんです。前回の講義にもありましたが、ミスマッチは起きるのではないかと思っています。彼らが望む仕事があるかどうかという、言葉以前の問題だと思っています。ない場合にはおそらく他の場所を探さるだろうというのが、一つ考えられること。それから、日本語学校の学生は大学に行くのか、就職するのかというのはまだ定かではないところ。県内にとどまる可能性はあると思いますが、彼らが求める仕事は大卒の学生とはまた違うのではないかと思っています。全部一緒にすると、課題が見えてこないのではないかと思っています。

野田会長：

大学生であれば就職先を求めて、ミスマッチが起こるから外のエリアに出てしまうことがあると。日本語学校のような学生の場合は、例えば自分に合った進学先があるかどうかが、県外に出て行く理由であることもあるかもしれない。就職先の問題、進学先の問題といった課題ですね。他にいかがでしょうか。

山下委員：

ただ共有したいだけなんですけど、私の周りは日本語学校に通っている留学生なんですけど、その子たちに困っていることを聞くと、日本語のこととか、社会的・文化的な違いで差別の一面もありますけど、一般的には経済的なストレスと言われてはいるんですけど、奨学金をもらってもほとんどの留学生が生活費が足りない。仕事もできるけど、時間が限られると言っています。日本の物価も高いし、学校のお金も結構要る。例えば病気をしても病院に行かないで我慢している。なぜ行かないのか、健康保険もありますが、診察料と薬代がいくら掛かるかわからないから、もし足りないと思うからと言っています。日本に来たばかりの留学生は住む所はありますけど、その部屋に布団とか食器とか足りないものが沢山あります。私たちは個人的に支援しています。家にあるものを皆さんに支援しています。彼らは暖かい国から来ているので、冬は毛布やジャケットを支援しています。できれば、例えば公民館の中で

相談ができる、皆さんが必要な物があればありがたいと思います。相談だけでなく、経済的・社会的な支援もできるとよいと思います。静岡でもたくさんボランティアグループがやっていると思いますが、その情報が留学生たちにちゃんと届いていないのだと思います。もっと病院のプロモーションとか、病院に通う方法を皆さんが届けるようお願いしたいと思います。

野田会長：

就職先であるとか進学先、それだけじゃなく文化の違い、医療のサポート、経済的な支援、温かい支援があるところが必要ということでしょうか。

山下委員：

精神的にも問題になっています。

エフィ委員：

①大学にいる留学生が県外に行くのは、教授の影響もある。県内には博士課程がないから。②静岡は賃金が低いから。③永住ビザを持っているにも関わらず、宗教の影響で、帰国する人もいる。小学校までは子供を日本の学校に行かせて、中学校からは母国で教育を受けさせている。

ヤマモト委員がおっしゃったことは、私も同じように思っています。ケースバイケースですが、私はインドネシア人の一部がなぜ静岡に定着しないか、原因は三つに分かれていると思います。大学に在学している留学生はなぜ県外に行くかという、まず一つ目は指導教員が定年を迎えられたとか、県内に修士課程はあっても博士課程がない場合、どうしても県外へ出なければならない。二つ目は、今在学している留学生がこれから大学を卒業して働きたいとなると、賃金が高い方へ行きます。私の後輩もそうでしたが、教授のお手伝いで大きい都市の方へとか、賃金が良いからという理由があるのはしかたがないと思います。三つ目は、数年間も静岡県内で働いている永住権を持っている人達が、帰国してしまった。なぜかという、ほとんど宗教の問題で、安心してお祈りができない、将来の不安、一番大事なのが子供の教育で、とりあえず小学校までは日本の学校に行かせて、中学校からは母国の学校に通う。将来日本は不安だから母国へ帰るというのを今まで何人か見てきたので、「もったいないですよ。」と助言しましたが、「いや、子供の将来が不安です。」とのことでした。インドネシア人の場合は原因が三つあるのかなと思います。

野田会長：

三つ目は静岡を離れるというよりは日本を離れるということですね。

エフィ委員：

多分東京の方がお祈りできる場所が多く、静岡にはまだそこまではない。

の 野田会長：

東京であれば、例えば礼拝の施設があるから、ないと不安に感じてしまうことがきっかけになっているということでしょうか。

エフィ委員：

東京とか大きい都市では、大学、駅とかお店の中にも礼拝所が沢山ある。観光地だからかもしれないですけど、生活上でそんなに不便はないと思います。

の 野田会長：

大学進学、それから就職だけではない課題があるというご意見でした。最後に金委員をお願いします。

金委員：

吉井委員が前回おっしゃったことについて、私も帰ってから確かにそうかなど、客観的なデータがないから、どれくらい定住しているのか、外に出ているか、帰国しているのか、わかりませんでした。私は静大を卒業して一回就職して、今またもう一回大学院で就職活動を経験して、周りに中国人ですけど、合計30~40人くらいいました。静岡県に来る人は優秀な人ばかりではないんです。極めて優秀な人、静大で優秀な人たちはやはり外に行ってしまう。まずビザの問題があります。技術・人文知識・国際業務の就労ビザがあるんですけど、それより高度な高度専門職ビザの条件は30代以内で、プラス年収500万だと15点とか、それ以下だったら10点とか、そこに加算して合計70点以上で決めますので、それを早めに申請したい人は県外に行って高収入を得るとか、大手企業に入るとかで、静岡県は理想的な就職先が少ないと思いました。私も来年東京に行ってそのビザを取って就職するからよくわかります。あと感覚的に言いますと、周りは中国に帰国する人がたくさんいます。特に今年は、私が3年前大学を卒業したときより多かったということがあります。国際的な情勢も関わるんですけど、彼らの特徴としては、就活がうまくいってない。就活をまともにやっていないから、別に中国に良い仕事があるかは別で、彼らが考えてるのが、やはり中国は慣れてるから、日本で特に周りの手助けが少ない状態で、自分で就職するのが難しい人があきらめて、中国に帰っています。それが私から見た問題点かと思います。あと客観的なデータについて、大学は

毎年進路の調査をされてるとおもいます。それを集計して、まとめて計算したら、たぶん出てくるかなとおもいます。

#### 野田会長：

そういったデータを客観的に整理するには、かなり複雑なデータ収集をしないと正確なところははじき出せないかなという気もしますので、せっかく私達それぞれの委員として、代表で意見を言ってますので、そのあたりも一つのデータとして見てもいいのかもしれませんが。もう一つの部分ですが、講座の案内について、どうやって参加したらいいかわからないですとか、その講座情報があれば就職できるか、定着できるのかということが、果たしてそれが結びつくかどうかということでしたけど、これについても、皆さんからご意見があればと思いますが、いかがでしょうか。講座を受講したい、講座を受講しさえすれば、それによって定住促進できるのかどうか、そういう結果が結びつくかどうかという、わからないのではないかというご意見、そういった講座が皆さん例えばどのようにお感じになるのでしょうか。この前もちよっとそういう話が出たと思うんですが。文化的なイベントへの参加ですとか、社会との関わりをもう少し積極的にとかそういったことでしょうか。

#### エフィ委員：

講座がいいと思うんですが、ただ皆さんが参加できるかどうか、仕事もあるし、大学もあるし、なかなか集まるのは難しいし、あとは日本語ですべてわかるのかというのもあるし、例えばアンケート調査をしていただいて、アンケートを通して書いていただくというのはどうでしょうか。講座は言ってることがわかりませんと言われてたら、もうアウトなので、難しいかなと思いました。

#### 野田会長：

時間がないからですとか、日本語がわからないからという理由で講座から遠のいていく可能性もありますね。講座だけではなくそういったイベントであるとか、そういったもの。あとは、私が一つ意見を言わせていただければ、生活している人は誰でも仕事とか勉強だけではなく、生活の中で楽しみたいと思っている方も多いのではないかな。その楽しみたいというものを実現することの一つに、そういった講座に参加してみようだとか、クラブに参加してみようというものがあるのかもしれませんが。そうすると、本当に静岡での生活が生き活きとしてきたら、もっと魅力的な街になるのかなという思いは実はあります。このあたりはあくまでも感覚的な意見です。その辺でこの意見については、一旦終了させていただきたいとおもいます。では、本日の主たる議題になっております、第11期報告書の骨子について、お手元の資料をご覧ください

たいと思います。ここにありますが、報告書の構成について書かれてありますが、ご覧のとおりは会長挨拶、目次、委員名簿、会議報告、提言資料といった、項目を考えております。そして次に、提言内容ですが、一つ目には教育の機会や場作りについて、読み上げておきますが、提言1、教育の機会や場作りについて、小・中学校において、多文化理解教育を受ける機会を拡充し、内容の充実を図る。外国にルーツを持つ子どもたちが、言葉の壁によって高校への進学を諦めることがないように、高校進学のための支援を充実させる。この二つを主な柱として考えて、具体的な取組、この四角の中ですね。外国にルーツを持つ子供たちの言葉や文化など、多様な国や文化を多文化理解教育に取り入れる。日本語を母語としない子供と保護者のための高校進学説明会の充実や、ハンドブックの作成など、高校進学に関する情報の周知に努める。言葉の壁により学校の授業や高校入試への適応が難しい子どもや、日本で義務教育を修了していない外国籍の人などを対象にした、夜間中学の設置に向けた研究を進める。というのが、提言1として考えているところです。後ほど皆さんからご意見をいただきたいと思います。そのまま続けて提言2も紹介させていただきます。提言2の背景については、別紙でもまとめてありますが、皆さんの意見、発言をもとに文書を作成しております。二つ目としては、留学生が住みやすいまち作りについてです。日頃から日本や静岡の文化を学んだり、地域の日本人と自然な形で交流できるよう、情報の提供方法について見直しを行う。市内の企業や事業所への就職を希望する留学生に対する支援を充実させる。この二つを柱とし、具体的な取組として、四角の中に書いてありますが、生涯学習施設の活動内容や利用方法などについて、市内の大学等に直接周知を働きかけ、学生が立ち寄る場所へのチラシ掲示等による利用促進を図る。大学1・2年生のうちから企業との接点を増やしたり、市内企業に対して、好事例の紹介をしたりして、企業の採用意欲を高めるという取組を進める。などとしてはどうかというふうに考えております。提言の背景は、一つ目と同様に、委員の皆さんの発言をもとに今後、文書を作成していくこととなります。本日はこの二つの案について、皆さんの意見をいただきたいとおもいます。大きく二つに分かれていますが、それぞれ約20分ほどかけて意見交換したいとおもっています。まず提言1ですが、教育の機会や場作りについて、ここに具体的な取組が3点書かれてありますが、その下にもう一つ四つ目の黒い点がありますように、もう一つ何か補ったらいんじゃないかっていうものがあれば、ここでぜひ皆さんからのご意見をお待ちしたいとおもいます。これについていかがでしょうか。順番でもいいですし、まずちょっと言っておきたいという方がいらっしゃればどうぞ。

**肥田委員：**

教育の機会の場作りについて賛成なんですけれども、小・中学校における多文化

理解、これはもう国際理解教育にはずっと歴史があるんですね。その結果どうだったのかって総括すると、どうだったのかなあという気がするんですね。一時総合的な学習が入ってきた時期に盛んになったときもありますが、こういうふうに戻しておけばいいでしょうみたいな、そんな感じがするんですね。もう一歩、じゃあ具体的に何をするのかっていうのが少し欲しいなど。かといって、じゃあ何を入れるのと聞かれても代案はないんですけど。それから高校進学のための支援という、うちの学校は30%外国人なんです。普通の高校には行けません。受験できない。英語はフィリピンの子は5ですが、あとは全部1です。なので、普通の学校を受験することが無理なんですね。それでどうしても行けなくなって、じゃあ仕事をしながら定時制でとなりますが、定時制の募集をやめる学校が出てきて、どんどん行く所がなくなっていく。そういう状況の中で、高校進学についてどんどん難しい状況になっていく。子供たちはサポート校に行くしかない。サポート校は対応に開きがあるので、面倒見がいい所もあるけれども、ドロップアウトする子が相当数いる。よく心配するのは、ドロップアウトした子ども達が、例えば闇バイトとか、そういう所に流れていくというのは、社会防衛的にみんなが知らないところで流されていく部分というのが非常に心配なんです。高校進学を勧めるっていうのはすごくいいんですけど、行ける所が欲しいんです。

の だ かいちょう  
**野田会長：**

高校進学説明会があったとしても、必ずしもそれで行けるわけではないので、それに代わるものを必要としている人もいるということでしょうか。

ひ だいいん  
**肥田委員：**

面接練習していると、「あ、この子落ちるな」っていう子がいるわけですよ。でも、日本語が稚拙で自分を表現できない、それでやっぱり落ちちゃう。リターンマッチをしているうちに歳を取ってしまう。

の だ かいちょう  
**野田会長：**

16歳で高校進学しようとして日本に来たのに、16、17、18歳と高校へ行く機会を失ってしまう子どもがいると。

ひ だいいん  
**肥田委員：**

相当勉強しないとね。ハングリーに。

の だ かいちょう  
**野田会長：**

高校の進学説明会も必要だとはお感じになりますか。それを求めている方もいれば、どうしたらいいか、一般の高校に入れない方もいるのではないかと、ということでしょうか。

肥田委員：

さっきエフィ委員が言ったように、それで子どもを一旦本国へ返すということが起きていていると思います。

エフィ委員：

はい。とりあえず小学校は日本だけど、中学校はインドネシアというケースです。

野田会長：

実際、本校に通っていた人の中にもお子さんを母国へ返してしまった人がいます。高校への進学を諦めることがないよう、高校進学のための支援とありますが、肥田委員のおっしゃる居場所との関係はどうでしょうか。

肥田委員：

私のところもその一つにはなるんでしょうけど。

赤田委員：

小学校に勤めているので、中学に関してはよくわからないところもありますが、高校進学の学力が足りないというお話がありましたが、そこまでの対応として考えられるのは、まず、外国から来た子ども達に、生活で使う日本語ではなくて、学習で使う言葉、例えば算数的な力はあっても、その問題の意味がわからないと、なかなか学習として成り立っていかない。今本校にも外国から来て1年ちょっといるお子さんがいますけれど、週に2回、1時間ずつ日本語指導の先生が来てくださって、どちらかというと生活の日本語というよりは、学習の中で担任と相談して、こういうところにつまずいていて、こういうところを補って欲しいというのを相談しながら進めています。そういうきめ細かな積み上げがあると、子供も自信を持ってできる場所があるので、その子の力を最大限に伸ばせるような方法に、きめ細かな支援というのは一つあるのではないかと思います。それから、多様な国や文化の理解ということで、外国語の授業などでも、色々な国の言葉や、色々な国の人の動画とかも昔よりもっと出るようになっていて、子ども達は以前よりはそういう多様な立場の国や文化だけではなくて、年齢とか色々含めて、多様な立場の人と一緒に楽しく過ごしていこう

という発想は、豊かになってきているのではないかと感じていますが、実際に自分達がどんなことを一緒にやってみるのか、楽しく暮らして行けるのかということころは、やはり一緒に生活してみるとというのが一番大きいのではないかと感じました。

#### 野田会長：

ちなみに多文化理解教育というのは、小学校や中学校では、本とか動画のみで行うものなんですか。それとも、実体験つまり外国の方が直接教室に来て、指導に当たることができるのでしょうか。

#### 赤田委員：

多文化理解教育という名前が付いているかはわかりませんが、一つはもっと大くりの色々な人達と社会をより良く作ってこうという発想は、道徳であるとか、様々なところで入ってきていると思います。あと、今ALTやGET（※外国語授業支援員：グローバルイングリッシュティーチャー）という外国の言葉や文化を教える先生達が入ってきていて、特にALTの先生は1年とか1年半で担当の学校が変わることが多いんですけど、色々な国の方が入ってきてくださっているんで、その国の言葉を教わるだけではなくて、その国の文化に触れるという面では大きいかなと思います。あと、外国にルーツがあるお子さんがいる学校も多いので、そういう子ども達は自然にいい関係を作っているというのはあると思います。

#### 野田会長：

いわゆるカリキュラムとしてではなく、普段から接する機会があるということでしょうか。

#### 角替委員：

肥田委員の意見と同じ感想を持っていて、少し踏み込んで言うと、もう少し具体的に何をするかを提言としては明記したほうがいいんじゃないかと思います。多文化理解教育という言葉自体ちょっとよくわからなくて、異文化間教育というか、異文化理解教育とか、ちょっとコンセプトがわからなくて、この提言を出すと、提言の結果、いや、多文化理解教育もうやってますというふうに答えられちゃうと思うんですね。あるいは、その提言を受けて何かやりましたと言ったときに、これが多文化理解教育ですって言ったときにそれで通ってしまうような気がするんです。それは提言として意味があるのか、つまり私の理解だと、多文化理解教育って、日本人の児童生徒が多文化を理解するための教育であると考えれば、これは日本人を対象としたということですね。それは我々がここで話し合っていることとは全然真逆の話

で、それは重要なんですけど、それよりも留学生に、外国にルーツがある子ども達の日本語学習をメインにするのであれば、別に多文化理解教育じゃなくてもいいんですよね。それは普通にやってるんだから。なので、そういう意味では、外国にルーツがある子ども達に対する日本語教育の充実を図るほうが、私はむしろ実効性がある意見なんじゃないかなと。文言を変えちゃうし、意味も若干変わってくるし、ちょっと怖い側面もあるんですけど、もう少し具体的に日本語教育っていう言葉を入れてしまったほうが、結果的に高校進学に繋がるはずですし、もっと回数や人が本当は必要で、そういう意味ではそれが結果的には高校進学につながって行くはずなので、引いては就職・定住につながると、ずっと先を見ていくと、ポイントになるのは日本語教育のしかた、公立学校でそれをどうするか、具体的にやっていく必要があるということ提言の中に盛り込んだ方がよいのではないかと思います。

#### 中村委員：

小学生の子ども達の話す言葉が英語なのかポルトガル語なのか何語なのかちょっとわかりませんが、99%は日本語でしゃべる。その中で子ども達も片言の日本語で話せば、まだ話が通じるんじゃないのかなと思うんですけど、多分教室に入ろうとすれば、日本語自体もある程度話せて初めて教室に入ると思うんですよ。そのときに会話はね、意外と経験すれば、時間が立てば立つほど、会話はできると思うんです。日本語の難しさをさげようか、ひらがながあって、カタカナがあって、漢字があるんですよ。漢字が一つの言葉を日本語で読むので、例えば日本語で簡単に言っても、漢字でやったときに解釈も変わっちゃう場合がある。だからそここのものの難しさというのがどうしてやったらいいかっていうのは、僕はテストのときに、進学の問題があったときに、どう解釈するかっていう、そこがまず引がかかっちゃうんじゃないかなと思ってるので、それまでにどのくらいの勉強をしながらいくのか。それとも一つは、高校には公立と私立があって、今皆さん方が言っているのは公立の話ですかね。進学しようとしてるのは私立の話なのか、私立と公立では多少難しさの度合いが違うかなと思います。そここのところを日本っていうのはすごく意外としっかりした線ができてるなっていうことがあったりするんで、その辺もちょっと気にはなるということ、進学ということになれば、そこに進学するだけの能力があるのかどうか、通常でもね。それと、単なるそこを受けたいっていうふうには思ってるのかによっては、やっぱりもちろん落ちないっていうのがあるんじゃないかなっていうのがあるから、日本人でも進学するときはすごい覚悟を入れながら学生は勉強してるわけね。それ以上のことを思っていないと、なかなかそここのところの一つのレベルのところ、進学の線があるとすると、すごく力を入れないと難しいなというのがあるので、そういうものもちょっと気にはなるなという。それと私は小学生

ならば、やっぱり友達を持つことで、それは中学生も一緒ですけどね、友達と話しながら、会話の中にこれをどうする、この問題はどうしたらいいかっていうものは聞きながらやらないと、自分一人でやろうと思っても大変だなと。そこが一つ気にはなるので、どのぐらい外国人の子どもが心を開いて、日本人の子ども達と一緒にセッティングしてくれるかなっていうところまでいってもらおうと、子供っていうのは、ものすごく能力があるので、意外とずっと入り込めるってところがあるのかなと思います。あまり難しく考えなくても、良さそうな気がするけどね。小さいときには。

#### 野田会長：

低学年の子供の問題と、中学生ぐらいの子供の問題とハードルがあるかもしれませんね。

#### 磐村委員：

私はやさしい日本語の普及活動をしています。最近では学校教育の中でも、バイパスとしてのやさしい日本語が注目されています。ある程度の年齢、中学生ぐらいになってくると、概念自体の理解もできてる部分がある。高校進学まで時間の制約があるなか、やさしい日本語で必要な日本語を理解することで教科学習に早くつなげるといっても言われています。色々な方策はあると思うんですけど、学校の中に、先生方に、やさしい日本語って広がってるのかなっていうと、やっぱり先生方も忙しくて、ちょっと優先順位が低いっていう話も聞いてます。これからそういうお子さんが増えていくことを考えると、やさしい日本語を先生方に学んでもらって、意識していただいてやってもらおうと、もっと違ってくるのかなというふうに思います。多文化の教育は、どういう位置付けになっているのかわからないんですけども、諸外国、近隣諸国を見ても、こういう教育に力を入れていて、小学校・中学校から第二外国語として学んで学校教育にも入るし、公民館などでは例えば入ってきた住民の言葉を学びましょうという、そういう機運があるんですけども、なぜそうできないのか。静岡市は政令指定都市なので、公立の学校に国際クラスをつくるとか、色々なことができるのではないかと思います。現実には厳しいんだよって言うんですけど、先が見えない状態ですが、私自身やさしい日本語をもっと伝えていきたいと思っています。

#### ヤマモト委員：

日本語能力とか、日本語ができないから学べないとか、きつい言い方をしますが、全てが日本語っていうと、おそらくそうではない部分も多くあるんじゃないかなと思います。もちろん日本語ができないから理解できないというのは、日本語で授業を

やっているのであれば、それはそうなんですけども、日本語ができないから能力がない  
というのはまた別の話だと思っんです。そこを彼らが持っている能力を私達  
教員側という立場で考えると、どこまでそこを引き出せるかという問題ではないか  
と思っんです。毎回日本語の問題となると、じゃあどこまで教えればいいんだろっ  
ていうのも一つの課題だと思っんです。どこまで教えれば、その子が伸びるかという  
ふうな限界はないはずですよ。そこに日本語教育っていうのは、なんかちょっと狭  
い範囲の話で、違うような気がしなくはないんです。批判的な発言になるんですけ  
ど、子ども達は色々な可能性を秘めていると思っんですよ。私達は一つの視点だけ  
で見ているのではないかなと思っます。

### 花沢委員：

同じ感じで確かに分かっているんですよ。日本で生まれ育った私の娘みたいな  
感じの子ども達と留学生の子ども達と、海外生まれで、ちょっとだけ育ってまた日本  
に来てっていう三つに分かれていますよね。日本で生まれた子ども達は、確かに  
日本語を自然に覚えていくんですよ。やっぱり保育園とか幼稚園とかに入って学  
ぶのが当たり前なことになるんですけど、そこでもし学校を続けられなくなっ  
たっていうのは子ども達のせいではなく、親のせいではないかと私は思っんですよ。せ  
っかく日本にいるのに、なんで帰らなきゃいけないの。どこに行っても勉強する人間  
なので、もう子どもが小さいときから、イタリアのモンテッソーリ教育など、引き  
出すものがたくさんあると思っんですよね。親もやっぱり子どもの背中を押す必要  
があると思っんですよね。親が諦めちゃうと子どもも諦めてしまっんですよ。確  
かに色々な国、それぞれ文化宗教も言葉もあるんですけど、そこで止まっちゃうと、  
何も解決できなくなっちゃうんです。そこは別に日本の問題ではないと思っ  
んですよ。個人の問題だと思っんです。留学生とかでしたらやっぱり日本語を  
勉強しに来てるわけなので、もちろん少しずつ色々な夜学とか講座とかに通っ  
たりするんですけど、そこで皆さん一生懸命日本語を教えようとしてるん  
ですけど、私も言い方がきついかもしれないですけど、そこで何も頭に入  
らないんだったら、元々入らない人だと思っんですよ。むしろ日本語の  
勉強には向いてないと思っんですよね。もうどうしても教えてあげても  
できないってなっちゃうと、仕事もできない。どうしてもしようとする  
と、同じ国の人のところで働くことになってしまう。バイトか正社員なのかわ  
からないですけども、結構複雑な日本での生活になってしまう。結局静岡だ  
と、多分他のところよりちょっと給料が低いと思っんですけど、他のところ  
に行きたがるのは多分もう皆さんも知ってるんですよ。もう完全に私の周  
りにも何人かいるんですけど。海外で育ってちょっと途中で、日本の学校  
に入ると、そこは留学生で来る子どもたちと同じ扱いになるんじゃないか  
な思っんです。さすがにすぐに日本の学校には

入れないので、そこはよくわかりませんが、そういう子ども達向けの学校はありますか。日本で生まれて、あるいは海外で生まれて、例えば小学2・3年生で、日本に引っこきなきていけないとなった場合は、その子たちを日本の学校に入れたり、多分静岡は少ないかもしれませんが、ないんですよね。結局少しずつでもベースに慣れるための学校・授業があれば助かるのではないかと思いますよ。そこはもう子どもでも大人でもただ子どもは脳がまだフレッシュなのですぐ入ると思うんですね。多文化の理解教育だと私も外国人として、日本人とモロッコ人のハーフになるんですけども、最初通っていた保育園だとそういう宗教ではないんですけどやってたんですよ。幼稚園だと普通の公立なので、あまりないですね。運動会のときに、色々な国の旗を飾るじゃないですか。外国人で、私ともう一人タイの子がいるんですけど、タイはやっぱりアジアだから国旗あるじゃないですか、モロッコはない。寂しかったですよ。3年間も通ってるうちに1回でも2回でも、それで他の子どもたちも「あ、モロッコの国旗だ」って、そこから娘もやっぱり色々な話になるじゃないですか、モロッコはこういう国だよ、こういう食べ物だよ。ママはこういうことをやってるよとか、そこからお互いの、もちろん娘も日本生まれ日本育ちなので、普通に日本語は話すんですけど、ただやっぱり他のむしろタイのこととかも、私も娘に知って欲しいし、日本のことはもう少しずつ小さいからまだなんですけど、周りの別に日本人だけじゃなくて、日本人と一緒にいる日本人の子ども達だけじゃなくて、他の外国人ハーフの子ども達も知った方が、お互いに色々勉強になるし、そのまま多分同じ小学校に入ったりとか、中学校に入ったりとか、その友達を作ったままもっと広がるっていうのがあるのかなと思います。

#### 野田会長：

お互いの態度のような姿勢っていうんでしょうかね、そういった働き掛けのようなものがあると、うまくいくこともあるのではないかとということでしょうか。日本語だけじゃなく日本の文化を学ぼう、あるいは日本の子どもも、来た外国の子どもの文化を学ぼうという。

#### 花沢委員：

全部覚えなくていいんですよね。やっぱりお互い少しずつ覚えると、少しでも楽になる。

#### 肥田委員：

具体的な取組の中で、夜間中学の話が出てきたので、ドキッとしたんですけど、すごい踏み込んだなという。ただその前に、日本で義務教育を修了していないって

ということで、「日本で」のところにこっちは入るのかという。県の方で二つ公立の夜間中学があるんですけど、電話をして聞いたら、最初は母国で中学校義務教育を終わってる人は入れませんよっていう話だったんですよ。ところが、私が電話して聞いたら、それはもう外れたという。誰でもいいんですよ。そうすると、このところは修了してないっていうのは、要らないんじゃないかってことです。それで夜間、公立の夜間中学校の計画がないっていうのは、指定都市でも三つしかないんですよ。静岡、浜松ともう一つは埼玉か新潟のどっちか。後は全部できています。できてなくても計画がある。これは恥ずかしい話、静岡にそういう話がないっていうのは、その辺は教育委員会に恥ずかしいですよって言っていただきたいです。

の だ かいちょう  
**野田会長：**

この具体的な取組の、「日本で義務教育を修了してない」という、この文言をもう一度確認した方がいいということですよ。

ひ だ い い ん  
**肥田委員：**

そうですね。もう資格が外れちゃってるはずですから。誰でもいいよっていう方向になっていると思います。

の だ かいちょう  
**野田会長：**

続きまして、二つ目の提言の留学生が住みやすいまちづくりについてのご意見を伺いたと思います。提言には、留学生が住みやすいまちづくりについて、生涯学習施設の使用方法とか、活動内容の周知などですね、その機会を増やしたりしたらよいのではないか、あるいは大学1・2年生のうちから、企業との接点を増やすような活動をしたら、定着がもっと図れるのではないかと。住みやすいまちになるのではないかと。提言ですが。

よ し い い い ん  
**吉井委員：**

冒頭で私の意見で取り上げられたところがあるんですけど、留学生が住みやすいまちづくりについてというタイトル自体については、全く問題がないというか、そのとおりだろうな、目指す理由としてこういうものがあってもいいだろうなと思うんですけど、ここで提言を出すってことになる、留学生が住みやすいまちをつくるってどうするのかっていうのがないと、先ほどちょっと批判的に自分が言ったのは、講座に参加しやすくしたから、住みやすくなると思うんですけども、住みやすくなるってということになると、衣食住からものすごい色々なことが入ってくるもんですから、あらゆるものが、日本人も同じなんですけど、住みやすいまちをつくるってことについて

ては色々考え方がるので、ものすごく幅広い話になってしまうんです。そういう中で講座をうんぬんっていうのは、あまりに小さな話というか、そういうことがあるもんだから、前回か前々回に申し上げたんです。住みやすいまちっていうのが、あまりにもタイトルが大きすぎて、もう少し住みやすいまちをつかって、留学生にもっと定着してもらいたいっていう話を私は勝手に先取りして思ってるんですが、そういうことを目指すんだったら、そこを書かないと。そうなってくると、2番目の話はいと思うんですけど、講座の話っていうのはどうかと。別に講座にそれほど執着するわけじゃないんですけども、もうちょっとポイントを絞らないと、住みやすいまちづくりって言ったら本当にいろいろ教育・医療のことから言葉の問題までであると思うので、このタイトルだけだと、ちょっと理由になり得ないんじゃないかと。

#### 野田会長：

もう少し具体的に、住みやすいまちにして、結果どういう目的、何を狙いたいかということが表現できていた方がいいのではないかとということでしょうか。いかがでしょうか、住みやすいまちづくりと聞いて、皆さんがイメージするものはいろいろあると思いますが。

#### 山下委員：

留学生が住みやすいまちづくりについて、私も思ったんですけど、私は外国人住民ですけど、どうすればいいのかな。なんか、やきもちを焼いてるような、なぜ留学生だけで、外国人住民はどうするか、どこに入るんだろうって。

#### エフィ委員：

多分留学生はビザの期間があるから、長く静岡に住んでいないとか、区別をしているようなんですね。外国人住民は定住があるので、私が気になったことが、医療では、病気のときです。留学生が言葉の壁でなかなか病院に行きづらいっていう現状があって、通訳者を探すか、あるいは自分でドラッグストアに行っておく。実際に私の後輩は、目が腫れてきて、ドラッグストアで薬を買ったそうです。本人がどんな薬が良いかわからないままパッケージだけ見て買った。「目がかゆいから、かすみって書いてあるのを買って、二日間ずっと使って治らないのはなぜですか。これ買ったんですけど。」と私に写真を送って、電話で話した。「あ、それは間違いですよ。かすみって痒いじゃないですよ。」と色々説明した。「え、違うの？痒いじゃないですか。」「違います。」要するに、言葉の意味が分からないということです。だから、意味もわからないのに薬を買ってしまうのが、すごく怖いなと思った。だから言葉が壁で、医療関係も、もう少し充実したほうが望んでいます。あと、もう

少し学習とか、色々なところに留学生に届けるような情報が欲しい。例えば私が知っている「わいわいワールドフェア」とか静岡市がやっているイベントですが、非常に良いイベントです。留学生だけじゃなくて外国人同士も、1年ぶりに会える場所にもなる。日本人も含めて会えるので、すごくいい交流ができるかなと思うんです。あとはアイセル21の「誰でも先生、誰でも生徒」というのがあって、それもいい計画だったんですけど、でもどうしても外国人の学生の参加は、まだ少ないと思います。情報がそれほど届かないと思うんですけど、どうしたらそれが色々なところに届くかっていうのをもっと一緒に考えていただきたいなと思います。色々なところに大学、学校、市役所なども含めて、イベントごとの情報提供があった方が良く思います。

#### 野田会長：

利用促進を図るという取組がここに挙げられていますが、やはりそういうものがあった方がいいのではないかとということでしょうね。

#### 吉井委員：

今年度に入って最初の会議のときに、事務局から説明があったのは、留学生が学ぶことを経て、就職を見つけて、もしかするとパートナーを見つけて結婚して静岡市に定住すると、そういう長いスパンの中で、静岡市に住んでもらう。だから、入り口は留学生だけど、最終的には、静岡の住民になるのか労働者になるのかわかりませんが、ここに住んでもらいたい人達をターゲットにした検討をしてもらいたいという話をいただいた記憶をしてくるものだから、先ほどタイトルにあったのは、住みやすいまちづくりをして、静岡が好きになって欲しいという話ではないような気がするんですね。留学生（一人ひとり）は住みやすくて良かったけど、僕は仕事があるから別の県へ行きますとか、宗教的なことがあってくに帰ります。でも静岡大好きですっていうのが、今回の議論の目的ではなかったと思います。そういうことが大事なんですけども、この場での議論は、確か最終的には就職口が欲しい人が静岡市内で見つけられて、静岡市に住んでもらうことが全体のテーマとしてあったとなると、私はさっき中途半端な話し方をしたんですけど、住みやすいまちづくりって言うよりも、留学生がそのまま静岡に住んでほしいということをもっと絞り込んで話さないと、住みやすいからここへずっと留学生が住んでたって色々な人の話を聞くと、友達もいるし、気候もいいし住みやすいんだけど、就職がもっといいところがあるので、東京や大阪へ行きますという人がいるとなると、そのところをもう少し踏まえて、提言という形にすると、留学生が静岡は本当に住みやすくていいところだったって言うってもらうのは本当に大事なことなだけで、この議論はなんとなくそうじ

やなかったような感じで自分は捉えてるもんですから、全く自分がしっくりこないんですけども。付け足しで言うと、やっぱり就職のところが一番ネックになっている気がする。以前、市役所の中でも議論があったようですけども、結局、静岡の大学とかで勉強した内容が就職口として静岡にないものだから、理科系とか、そうすると東京、大阪、名古屋へ行ったりとか、出て行かざるを得なくなるので、学んだことと地元の企業にミスマッチがあるっていうことが大きなテーマとして、以前議論されたことがあるので、それを今、急にそういう企業誘致をしてどうのこうのという話はいかないんじゃないかと思うんですけど、何かそこに対しての提言をするっていうのが「意味」があるんじゃないか。だから、一番下のところの企業側の採用力を高める取組みとか、こういうことは提言として非常に今回は合ってると思うんですけど、その一つ前の講座のことは、内容は間違ってるわけじゃないんですけど、今回の議論の中心にはなり得ないんじゃないかと思います。

#### 金委員：

吉井委員がおっしゃったとおりだと思います。フォーカスしたいところは、まず住みやすいっていうのがぼんやりしていて、むしろ定着しやすいとか、定住しやすいとかに替えたほうがわかるかなと思います。今言っている留学生達は、さっきの話でいうと、県外に決まった人、県外に行きますっていう人じゃなくて、就職活動がうまくいかないとか、日頃、日本社会・静岡であまり接点がない。それでそのまま帰っちゃう人。静岡は好きだけど、うまくいかなかった人をサポートするとしたら、就職のところが大きいかなと思うし、日頃から具体的な取組のところで、生涯学習施設を利用するというのは、ちょっと接点を増やすべきかどうか、私も思います。生涯学習施設の活動内容と利用方法についてですけど、私は一つの思い出があります。それは静岡市の市民会館で、外国文化を学ぼうっていう講座があって、私はその講師として一回だけやっていたんですけど、そのときに、まず報酬がありました。市から報酬がありましたし、そのときは講師としてだから、私がプレゼンして、みんなが聞くというスタンスだったから、よい経験だったんですけど、もう1回は焼津市の地域の会館で、市民の方たちとの話し合いとか、桜の祭りがあってその後のお祝い会だったんですけども、そういう地域と交流するときに、報酬がなかったんです。具体的な目的もなかったんです。私が外国人留学生として、その場において地域とどう交流するのか、逆に相手もいきなり外国人が来た。どう交流するのか、コミュニケーションを取るのかもわからないですよ。だから結構まずい感じでした。私は、この生涯学習施設の話で言うと、明確に留学生はどういうスタンスでっていうときもあるし、そこで活動に参加してもらおう地域の住民と交流するときに、どういうスタンスでいくのかというのを行政・地域からちゃんとわかっってもら

ほうがいいのかなどおもいました。また、地域との接点を増やすだけで、自治会に参加してもらったり、近くの活動に入るのも、相当ハードルが高い。多分日本人のみんなも困っているおもいます。

#### てるやいいん 照屋委員：

留学生は医療の情報が無いから、病院には行かないんです。静岡済生会総合病院で毎年10月に外国人のための無料医療相談会がありますが、今回はすごく人に声を掛けて、日曜日だったんですが、200人来た方達の7割は留学生でした。そしたらインド、バングラデシュ、インドネシア、色々な国で今年初めてやって、私は元々ラテンの担当だけど、ラテンは少なく、逆にそっちの方が多かった。一応検査はやってるんだけど、その中で残念だけど、2人だけ、1人はもう胃がん。ずっと1月から痛みがありましたとか、でもなぜ近くのクリニックに行っていなかったかという、お金が掛かるから。でも見たら、国民健康保険に入ってるの。なんで健康保険に入ってるのに、病院に行かないの。口コミでは、いや、病院に行くと高いよとか、1万円、5万円、10万円とか、イメージが余計になっている。情報が無いから、もう胃がんのステージ2になっている。もう1人は、肺炎になって、ずっと4月から咳があって、大学行かなきゃならないし、休みの日は仕事行かなきゃならないし、バイトしなきゃいけないとか、そういうことがあると、残念だと思ってます。確かに日本は高いよと私が来る前に言われたけど、実際は安いとまでは言わないけれど、でも後悔だったなと思って。この方はもう、国に帰りましたが、今済生会病院だけがやってるんだけど、他にも日赤とか県総とかもあると、1年に1回は、例えば済生会病院は10月だけど、4月ぐらいとか他の月にもやれば、いいんじゃないかなと思って。すごく大事な事かなと思ってます。

#### の だかいちよう 野田会長：

実際に、日本は医療の経済的な支援はかなり恵まれている国ではないかなと私は思っていたのですが、つまりその大学生は、そのシステムを知らないでいた可能性が高いということでしょうか。

#### てるやいいん 照屋委員：

ただ友達から聞くとか高いよって聞いて、以前の無料相談は大抵オーバービザで、ビザが無いから、来て何かあったら治療するんだけど、今回私がびっくりしたのは留学生でした。保険証を持ってるのはなんで早めに行かないのって、医療費が高いイメージと情報がやっぱり両方間違ってます。

野田会長：

そういう観点もからも、留学生が住みやすいまちっていうことが、もしかしたらさつき山下委員も言ったように、定住している方にとっても、そういった情報提供が、留学生が住みやすいように情報提供したら、もしかしたら定住してる方にも同じようにメリットがあるのかもしれない。

花沢委員：

住んでいると大体周りの家族とかから話を聞くんですけど、普通に生活はできてると思うんです。留学生ですと、よく知らないですけど、例えば大学生であつたら、大学へ行きます。大学では、そういう紹介や説明会はないのでしょうか。静岡に住む、とりあえず静岡の魅力とか、こういうイベントやっていますよとか、ゴミの捨て方とか、そういう細かい情報の説明は受けていないんですか。

金委員：

普通の留学生向けのガイダンスは有ります。内容としては交通安全、交通ルールとか、静岡に特化した内容はゴミの出し方とか、地域の活動があるとか。

花沢委員：

具体的であればいいのではないかなと思う。それこそ病院へのかかり方とか。

照屋委員：

健康なときは左から右へ抜けてしまうと思います。。

花沢委員：

これから日本で生活するのにね。

エフィ委員：

誰かが情報を分散しないと、知らない人が多いです。私は医療通訳として10年近く関わっているんですが、毎年フェイスブックで情報を提供し、ここにイベントがありますよとか、初めてその情報を知る人が多い。やはり情報をまったく知らずにいる方が多いです。

照屋委員：

1万円だったよとか、1万2千円だったよとか。

花沢委員：

普通に内科に行ったら、こういう症状があった場合は大体これぐらいからこれぐらいという感じの説明を受けた方が、少しでも安心するのではないかと思います。症状によってやっぱり金額は変わる、治療によって金額が変わるっていうのは、どこの国でもあるので、日本だからこそではないと思うんですよ。だからみんな関心が薄いのではないのでしょうか。

野田会長：

もしかしたら講座の問題でもそうなんですけども、情報の提供がうまくいくと、留学生だけじゃなく、皆さんにとっても住みやすいと感じるまちになるのかもしれないですし、また就職ということも、人生設計とか長期的な視野で住みやすさっていうのが感じられるようなまちになるのかもしれないですね。留学生は、私のイメージですと、勉強が終わったら帰国する人が留学生というイメージでしたが、最近はその考えがあまりなくて、本当にそのまま定住する方も、本校の卒業生には結構多いですから、もう本当に留学生って言うても昔の考え方とは違いますので、長期的な視野で考えた方がいいのかなという気がしました。

中村委員：

吉井さんがお話ししているのは、要するに就職先が静岡じゃないってところがね、大前提に言ってるような気がするので、だからそれを何とかして静岡市で誘致する、企業誘致のところも、僕はこういうところで留学生が定住するっていうことが、ここに提示するだけの、要するに生活をしなくちゃならないわけだから、会社がなければ提供できないんですよ。だから、そこもこの会議の中でも要望して、何かをこうアピールするようなのがないと、このままいったら、さっきの優しい静岡ですわねで終わっちゃうんじゃないですか。そうすると、何のためにこの議題を乗っけてるかっていうことになるね、今市長もだいぶ色々な土地の問題で、あまり建物ができないところを解除して、建物ができるような方向にね、今政策の中でしてるわけですよ。そういうものを今留学生が就職できるような工場を建ててもらうのが一番いいと思うし、それと併せて、企業に留学生を採用してもらっていうことをしてないと。今留学生は何人くらいいるんですか。

事務局：

最新のデータで620人ぐらい。

中村委員：

留学生というのは、何年ぐらいの人をいうんですか。要するに、大学院に行つて終わつたら留学生になるのか、それとも大学まで行つてる人も留学生というのか。その大学院に行つても、また留学的な話で、ビザを取るとかつていうこともできるのですか。それはもうあくまでも勉強のための留学つていうことだけしかできないでしょう。それでも最低でも2年とか4年とか、いるわけでしょ。そのときだつて就職しないと、どこかでアルバイトしないと駄目じゃないですか。生活できないでしょ。必ずしもアルバイトが必要な学生ばかりじゃないけど。だから、その後就職を提示をしようとするから、静岡にどのぐらいの企業の受入れ口があるかつていうところまで調査しないと、名古屋なり、神奈川、東京、大阪、本当に今はみんな出て行つちやうから人口が減つてるんですよ。

野田会長：

もっともだと思います。企業の誘致つていうのは、留学生だけでなく、本当にみんなそうですね。大学や専門学校で勉強してる人にとつても共通の問題かと思ひます。

中村委員：

そういうものは何かかういふ取組の中に要望として入れなくていいのかな。

野田会長：

誘致という文言はここにはないんですけれども、留学生に対する、今ある市内の企業や事業所に支援を行つている。

中村委員：

それが留学生はないつて言うんでしょ。

花沢委員：

ないとは思ひません。多分分野によつて、入れる入れないと、勉強の専門によつて、そこに就職できるかどうか。あと、空きがあるかどうか。

野田会長：

調べてみないとわからないですけど、もしかしたら会社があるけれども、雇用の機会がないのかもしれないし、誘致すれば見つかるかどうかもちよつと深く調べてみないことには、わからないかも知れない。

なかむらいいん  
**中村委員：**

そういう外国の人たちが就職したら助成金を出すとか、いろんな方法があると思うんです。そういうものをこういう場でしなくてもいいのかなって思っちゃう。もう少しアピール力を持たないと、これ条例か何かにするの。それよりこれもう一歩前に進んでるっていうことじゃないの。

よしいいん  
**吉井委員：**

先日浜松であったシンポジウムに参加したときに、日本は人口減少が進んでいて、ものすごく人口が減ってきているんだけど、労働人口というか、就業人口、働ける人とか働いてる人の人口は、それほど人口減少ほど減ってない。それは何でそうなのかっていうと、今まで働いていなかった人達が労働市場に出てきて、働き始めているものだから、人口が減るほど働く人が減ってはいない。それはどういう人が出てきたかっていうと、それは外国人が補ってるわけじゃなくて、外国人は本当に少ない人数しか補えてないんで、何が補ってるかっていうと、今まで働いていなかった、多分女性とか高齢者とか、そういう今までは働いていないで家にいた人達が、色々な条件を揃えてくれて、働けるようになってるので、労働人口がそれほど落ちなくても済んだ。ただ、もう今の段階で、これだけ今103万円とか言って、あれでまた働く人が増えるのかもしれないけれど、とにかくその先生がおっしゃるには、これはもう頭打ちだと。これ以上日本人の中で色々働く人を労働市場へ出そうとしても、もう出てこない。そうなってくると、本当に外国人に頼る時代がこれから来るんじゃないかとその先生がおっしゃったので、その自己管理みたいなところをどう判断するのかわからないですけども、多分、今はまだ外国人が増えて、労働者が増えてるって言うてるけれども、その先生がおっしゃるには、これからが本格的なそういう時代が来るんだっておっしゃってたので、自分もなるほどと思ったものですから、もちろん、留学生の人たちもそうだし、受け入れる企業の方も本気でそういうふうに考えていかないと、通常の日本人の枠組みの中で人を採用しようと思っても、もう採用できる人数はどんどん減ってくばかりなので、これからが本当の時代なんだっていうことはおっしゃってました。

の だ かいちょう  
**野田会長：**

静岡市内で就職活動が活性化するといいですね。では、そろそろお時間ですので、進行を事務局にお返ししたいと思います。

いじょう  
以上

ぎじろくしょめいじん  
議事録署名人

しずおかしたぶんかきょうせいきょうぎかい かいちょう の だとしろう  
静岡市多文化共生協議会 会長 野田敏郎